様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(A)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３２４２０３６

研究課題名（和文）文明移動としての「仏教」からみた東アジアの差異と共生の研究

研究課題名（英文）Research on the Variance and Coexistence of East Asia from the Viewpoint of "Buddhism" as a Movement of Civilization

研究代表者
新川　登亀男（SHINKAWA, Tokio）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：５００９４０６６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　28,500,000円

研究成果の概要（和文）：インド亜大陸発祥の「仏教」がアジア世界に広く流伝したことと、そのアジア世界で多様な国家や社会や文化が形成されていくこととが、どのような関係にあったのかを調査研究した。とくに、国家の構築と社会の秩序化、造形表現や文字言語表現の展開、諸宗教や儀礼・習俗との複合、という三つの観点からアプローチした。そして、これらの観点が文明としての「仏教」の三要件に合致するものと考えた。同時に、このような「仏教」文明の観点からアジア世界を理解しなおすことの重要性と必要性を、様々な方法（シンポジウム、研究会、共同調査、論集刊行など）で検証し、また、広く訴えた。

研究成果の概要（英文）： In this research, we investigated the influence of “Buddhism” originated in the Indian subcontinent on the entire Asian region, and also discussed how “Buddhism” was localized for Asian societies when a nation, society or a culture is formed.
Especially, we focused on three issues：the organization of national system and social order, the movement of linguistic and formative arts, and the fusion of religions and rituals as well as customs. These viewpoints are fundamental for reconsidering the influence of Buddhism as a civilization in entire Asia. The importance and necessity of this approach was demonstrated through many symposiums, research conferences, joint researches and papers.

研究分野：人文学、アジア地域文化学、日本古代史学

キーワード：「仏教」文明　世間（世俗）秩序　造形　文字言語　複合宗教　グローバル化　多様化　国際交流

１．研究開始当初の背景
本研究は、（１）早稲田大学大学院文学研究科で展開した 21 世紀 COE プログラム（略称 COE）「アジア地域文化エンハンシング研究センター」（代表　大橋一章　2002 年度～2006 年度）、（２）組織的な大学院教育改革推進プログラム（略称 GP）「アジア研究と地域文化学」（代表　大橋一章　2007 年度～2009 年度）、（３）早稲田大学重点領域研究機構の東アジア「仏教」文明研究所（所長　大橋一章、のち新川登亀男　2010 年度～2014 年度）における前近代東アジアの歴史文化共同研究を基盤として開始されたものである。

２．研究の目的
（１）本研究は、基盤となる上記の研究目的を尊重し、継承してきた。つまり、前近代東アジアの多様な歴史世界をいかに理解して、のちにつなげたらよいのかということを主眼においた。とくに COE では、中国四川地域の側からみた独自の文化形成と「漢化」の関係をモデルにして、東アジアの諸地域・民族・社会・国家の歴史文化形成過程を再考した。ついで、GP では、大学院博士後期課程「アジア地域文化学コース」における集団指導体制（COE 研究体制の教育版）を通じて、これまでの研究目的と成果を検証しながら、未来への橋渡しに努めた。

（２）上記の経緯を踏まえ、本研究は、あらたに「仏教」からの視点を基軸にすえた。すなわち、インド亜大陸発生の「仏教」が東アジアに流伝することは、前近代におけるグローバリゼーションにほかならない。その「仏教」は、なぜ広く流伝することができたのか。この流伝によって、東アジア世界の諸地域・民族・社会・国家、そして宗教・文化・習俗は、どのように構築されていったのか。そして、そこに、いかなる差異が顕在化したのか。あるいは逆に、共生の可能性が生まれたのか否かを研究の目的とした。

３．研究の方法
（１）本研究は「仏教」を基軸にすえたが、それは仏教教理や仏教史に限定されるものではない。むしろ、グローバルな文明として「仏教」をとらえ直し、その文明としての様々な移動が流伝であると考えた。そこで、文明としての要件を想定し、それに対応する研究チームを三つに編成した。①「世間（世俗）秩序との交差」（略称：世間秩序プロジェクト）、②「造形と諸表現」（略称：表現プロジェクト）、③「宗教としての複合化」（略称：複合宗教プロジェクト）の三つである。

（２）上記の三つの研究チーム名は、それぞれの研究課題名でもある。①は、君主権・国家・社会および諸集団にわたる世俗秩序の構築と改編を促した「仏教」の研究。②は、彫刻・絵画・建築、また文字・言語などの諸表現や認識形態に転回を迫る「仏教」の研究。③は、既存の宗教・道徳・習俗・儀礼などとの複合化を推進する「仏教」の研究。しかし、これらの三研究は、相互の連携を重んじ、定例研究会（大学休業期を除く毎月開催が原則）で意見交換を重ねた。また、共同調査や各種のシンポジウムにおいて、緊密なすりあわせを心がけた。

４．研究成果
（１）本研究の基盤となる定例研究会を、年平均 7 回開催した。この研究会では、上記三つの研究グループに属す研究分担者が、各自、研究の現況を報告し合い、議論を重ねた。必要に応じて、研究分担者以外の報告者を招聘することもあった。研究分担者の研究分野は、歴史学（日本・朝鮮・中国）、美術史学（東洋・日本）、和漢比較文学、仏教学、道教学、考古学、人類学などと多岐にわたるが、各分野の資料とその扱い方、研究方法、研究成果に関する相互の垣根を低くし、共有化に道を開いた。

（２）一方で、それぞれの分野における問題意識や関心の違いも確認できた。たとえば、教理学と現実の歴史とをいかに組みあわせて理解すべきか。言語・文字の典拠論をいかに超えるか。美術様式をどのような観点から理解したらよいのか。考古学・人類学の調査成果をどのように解釈して説明すべきなのか。また、歴史文化の差異をいかに理解すべきなのか。これら多くの基本的な課題を確認し合うことになった。その結果、共通の資料にもとづいて各分野相互で研究を詰める方法が長期的には生産的であること。つねに、他分野への説明責任を自覚し、他分野で理解できないとされることについては自分野で再考すべきこと。少なくとも、以上のことが基盤的な成果ないし合意となった。

（３）共同調査を二度、実施した。一度目は、百済地域（韓国公州・扶余・全州・益山）である（2012 年 3 月）。主な対象は、新発見の寺院跡、舎利荘厳具（銘を含む）などである。韓国国立中央博物館の李炳鎬氏らの教示を得た。その結果、戦前における日本側の寺院伽藍配置論に再考が必要であること、舎利埋納の変遷を東アジア史のなかで位置づける必要があること、などが議論され、共有化された。また、この問題とのかかわりにおいて、さきの李炳鎬氏を定例研究会に招聘し、さらに議論を重ねた。

（４）二度目の共同調査は、中国西安と太原地域の天龍山・龍山石窟群である（2012 年 9 月）。西安では、終南山地域を踏査し、道観にかかわる遺跡などを視察した。太原では、中国北朝期以降に展開された天龍山仏教石窟群と龍山道教石窟群を、当地研究機関の協力を得て、詳細に調査し、意見交換会をもっ

た。その結果、隋唐興隆の拠点となった当地域の地政学的な位置づけが確認された。北朝期の首都（晋陽など）と石窟群との関係が確認された。交通の要点として朝鮮半島とのつながりや、それにかかわる石窟銘が調査できた。総じて、中国北朝・隋唐さらには宋代以降に及ぶ中国諸王朝と「仏教」とのかかわり方を集約的かつ具体的に学ぶ機会を得たことは貴重であった。さらに、この調査を補う意味から、石見清裕氏（早稲田大学：中国史）を定例研究会に招聘して、太原地域の地政学的な研究報告を得、議論を重ねた。

なお、地形上、当石窟群を踏査すること自体容易ではない。加えて、破壊も甚だしいものがあり、これには戦前における日本側の関与も指摘されている。時あたかも、この調査は、9,11 の反日運動に遭遇し、現在史に至る長い歴史の重みを体感することにもなった。

（５）本研究のかかえる諸課題に即して、様々なシンポジウムを催した。その主たるものを年度別にあげる。まず、初年度の 2011 年度は、国際シンポジウム「『仏教』文明の東方移動―その受容と抵抗―」（12 月 9 日、早大）を開催した。本研究の諸課題確認を目的として、ジャン・ノエル・ロベール（フランス学士院）、張総（中国社会科学院）、崔鈆植（韓国木浦大学）、亀田修一（岡山理科大学）の各氏を招聘した。言語、美術、歴史、考古の諸分野研究からの提言を得て、研究分担者と意見交換をおこない、今後の研究への指針を得た。

（６）2012 年度は、以下のとおりである。
①日韓合同シンポジウム「百済弥勒寺西塔の舎利奉安からみた『仏教』文明の東方移動」（7 月 14 日、早大）を開催した。これは、上記共同調査を踏まえ、新発見の舎利荘厳調査責任者裵秉宣（韓国国立文化財研究所）以下の諸氏を招聘し、国内外の研究者を交えて検討をおこなった。長い銘文に記された「法王」「王后」「大王陛下」の関係は大いに注目される。
②国際シンポジウム「『仏教』は、なぜ東漸したのか」（12 月 22 日、早大）を開催した。「仏教」がなぜグローバル化したのかは、本研究過程にける難問である。ポール・グローナー（バージニア大学）、侯冲（上海師範大学）、南東信（ソウル大学）、宮﨑健司（大谷大学）の各氏を招聘し、「東漸」以外に逆流や西伝などにも注意すべきことが議論された。この方位観再考は、貴重な成果となった。
③シンポジウム「中国占い文化の日本的展開」（1 月 26 日、早大）を開催した。研究分担者の工藤元男を中心にして、中国占書（出土文字資料）と日本の陰陽道書の関係を検討した。両者に類似点は多いが、それをつなぐルートが辿れないこと、「仏教」との関係が不透明であることなどの課題が残った。

（７）2013 年度は、以下のとおりである。①シンポジウム「対敵と仏法」（9 月 28 日、早大）を開催した。本来、「仏教」は救済を旨とすると言われているが、それは偏った先入観にもとづく見方であり、他者への調伏、防御を実践する両義性があることを、美術や儀礼作法を取り上げて議論した。大島幸代（龍谷大学）、長岡龍作（東北大学）、長坂一郎（東北芸工大学）、三上喜孝（山形大学）、黒田智（金沢大学）の各氏を招聘した。
②国際シンポジウム「言語・文字の転回からみた『仏教』流伝」（12 月 21 日、早大）を開催した。朱慶之（香港教育学院）、吉田豊（京都大学）、阿部龍一（ハーバード大学）、ジョン・ホイットマン（国立国語研究所）の各氏を招聘し、これに研究分担者河野貴美子が加わった。「仏教」流伝にとって、言語・文字の翻訳や書写行為はきわめて重要な要件であるが、研究発信の困難さが痛感された。

（８）最終年度の 2014 年度は、日韓中共同国際シンポジウム「仏教文明の拡大と転回」（10 月 24・25 日、早大）を開催した。三国から合わせて 17 名の報告者（日本の研究分担者も含む）が集い、本研究の三本柱に準拠した構成で実施された。中国西域方面での造像遺物調査の成果が公表されたが、各国の「仏教」研究の現状も確認できた。ただし、その研究基盤や認識などの相違も目立ち、それぞれの近現代史が見て取れた。これも、大きな成果と言える。

（９）その他、特筆すべき事柄があるので、以下に記しておく。
①本研究において、インドや東南アジアの「仏教」文明理解が欠落していたので、東京大学東洋文化研究所の古井龍介（インド）、馬場紀寿（東南アジア、スリランカ）の諸氏を招いて特別研究集会をひらいた（2013 年 6 月 26 日、早大）。本来の「仏教」の特徴や社会基盤、そして習俗などを学び、いわゆる「東漸仏教」との間に断絶もあることが分かった。これは、大きな収穫と言える。
②最新情報を得て、特別研究集会「ヴェトナム出土の隋仁寿舎利塔銘」をひらいた（2014 年 7 月 18 日、早大）。新発見の舎利銘調査研究に関係したファム・レ・フイ（ハノイ国家大学）、河上麻由子（奈良女子大学）の諸氏と加島勝氏（大正大学）を招聘し、最新の知見を得た。隋の仁寿舎利塔建立事業がヴェトナム北部（交州方面）にまで及んでいたこと、交州史の解明が進んだこと、などの成果は大きい。他の科研（A）チームも加わり、議論も活発化した。
③2013 年度と 2014 年度にわたり（各 2 月末～3 月中旬）、千葉県龍角寺跡の考古学調査を実施した。レーダー探査にはじまる新技術導入の調査により、古代から近世にいたる伽藍配置変遷が鮮明化した。また、古代瓦の大量発見、金箔の塼（土製のタイル状）、墨書土

器などが発見された。関東地域寺院跡としては珍しい成果であり、「仏教」文明のグローバルな側面とローカルな側面との照合が今後望まれる。
④日本の天平改元以前（729 年以前）における資料（金石文、史書、縁起資財帳、木簡、写経奥書など）のうち、「仏教」にかかわるものを網羅的に蒐集整理した。とくに、長屋王発願の和銅経と神亀経（いずれも大般若経 600 巻）の伝来を悉皆調査したことの意義は大きい。これらの調査整理には、多くの大学院生が協力し、今後の研究への土壌を築くことができた。また、長屋王発願経の悉皆調査は未曾有のものであり、その成果（最終報告は論集下記④に掲載）は、今後、多方面で長く活用されるであろう。

（10）最後に、以下の論集出版をもって本研究の成果公表に努めたことを付記しておく。
①大橋一章・新川登亀男編『「仏教」文明の受容と君主権の構築－東アジアのなかの日本－』（勉誠出版、2012 年 3 月）
②新川登亀男編『「仏教」文明の東方移動－百済弥勒寺西塔の舎利荘厳－』（汲古書院、2013 年 3 月）
③新川登亀男編『仏教文明と世俗秩序－国家・社会・聖地の形成－』（勉誠出版、2014 年 3 月）
④新川登亀男編『仏教文明の転回と表現－文字・言語・造形と思想－』（勉誠出版、2014 年 3 月）
　以上は、研究分担者と研究協力者の執筆になるものであり、定例研究会、各種シンポジウム、特別研究集会などの成果を集約したものである。とくに、③④は、本研究の総まとめであり、総勢 38 名からなる論集である。③は総頁 602、④は総頁 655 となる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 118　件）
①新川 登亀男、法隆寺金堂釈迦三尊像光背銘の成り立ち、国立歴史民俗博物館研究報告 194、査読有、2015、pp277－326

②工藤 元男、「視日」再考、新川 登亀男編『仏教文明と世俗秩序』勉誠出版、査読無、2015、pp451－470

③大久保 良峻、台密に見る密教の東漸－円仁撰『金剛頂経疏』の教学的特色を中心に－、新川 登亀男編『仏教文明の転回と表現』勉誠出版、査読無、2015、pp239－262

④城倉 正祥、下総龍角寺の測量・GPR（Ⅱ期 1・2 次）調査とその測量、新川 登亀男編『仏教文明の転回と表現』勉誠出版、査読無、2015、pp509－550

⑤高橋 龍三郎、霊（たま）からカミへ、カミから神へ、新川 登亀男編『仏教文明と世俗秩序』勉誠出版、査読無、2015、pp490－538

⑥李 成市、天龍山勿部珣功徳記にみる東アジアにおける人の移動、新川 登亀男編『仏教文明と世俗秩序』勉誠出版、査読無、2015、pp240－260

⑦河野 貴美子、古代日本の仏教説話と内典・外典－『日本霊異記』を中心に、新川 登亀男編『仏教文明の転回と表現』勉誠出版、査読無、2015、pp169－208

⑧川尻 秋生、弘法大師の成立－真言宗の分裂と統合、新川 登亀男編『仏教文明と世俗秩序』勉誠出版、査読無、2015、pp151－184

⑨肥田 路美、弥勒仏像の諸相と「仏教」の流伝－四川地域の造像を例に、新川 登亀男編『仏教文明の転回と表現』勉誠出版、査読無、2015、pp379－406

⑩森 由利亜、道教の出家戒の成立と意味、新川 登亀男編『仏教文明と世俗秩序』勉誠出版、査読無、2015、pp471－489

⑪李 成市、六－八世紀の東アジアと東アジア世界、岩波講座日本歴史 2、査読無、2014、pp211－250

⑫新川 登亀男、「仏教」文明化の過程－身位呼称表記を中心にして－、新川 登亀男編『「仏教」文明の東方移動－百済弥勒寺西塔の舎利荘厳－』汲古書院、査読無、2013、pp189－268

⑬川尻 秋生、「神護寺五大堂一切経目録」の性格、日本史研究 612、査読有、2013、pp28－50

⑭工藤 元男、具注暦の淵源－「日書」・「視日」・「質日」の間－、東洋史研究 72－2、査読有、2013、pp36－68、

⑮河野 貴美子、古代日本仏典注釈書所引的《文選》初探－以善珠撰述書為中心、張伯偉編『域外漢籍研究集刊』9、査読有、2013、pp31－42

⑯高橋 龍三郎、セピク川中流域の儀礼と霊（spirit）、天理参考館報 26、査読無、2013、pp7－20

⑰肥田 路美、七・八世紀の仏教美術に見る唐と日本・新羅の関係の一断面、日本史研究 615、査読無、2013、pp53－78

⑱大橋 一章、舎利安置の百済化、新川 登亀

男編『「仏教」文明の東方移動－百済弥勒寺西塔の舎利荘厳－』汲古書院、査読無、2013、pp98－126

⑲大久保 良峻、日本天台創成期の仏教－最澄と円仁を中心に－、浅草寺仏教文化講座 56、2012、査読無、pp37－54

⑳河野 貴美子、日本古代の仏典注釈書にみえる『論語』の引用をめぐって、大橋 一章・新川 登亀男編『「仏教」文明の受容と君主権の構築－東アジアのなかの日本－』勉誠出版、査読無、2012、pp199－226

㉑新川 登亀男、「サニハ」型の「マツリゴト」－『伊予国風土記』逸文を読む（1）、大橋 一章・新川 登亀男編『「仏教」文明の受容と君主権の構築－東アジアのなかの日本－』勉誠出版、査読無、2012、pp3－50

㉒李 成市、東アジアにおける百済木簡、鈴木靖民編『日本古代の王権と東アジア』吉川弘文館、査読有、2012、pp253－271

㉓川尻 秋生、「長寛勘文」を読み直す－君主権と熊野－、大橋 一章・新川 登亀男編『「仏教」文明の受容と君主権の構築－東アジアのなかの日本－』勉誠出版、査読無、2012、pp295－320

㉔大橋 一章、飛鳥寺の発願者、大橋 一章・新川 登亀男編『「仏教」文明の受容と君主権の構築－東アジアのなかの日本－』勉誠出版、査読無、2012、pp88－114

㉕肥田 路美、中国皇帝と阿育王像、大橋 一章・新川 登亀男編『「仏教」文明の受容と君主権の構築－東アジアのなかの日本－』勉誠出版、査読無、2012、pp115－142

㉖工藤 元男、「日書」と陰陽道書、大橋 一章・新川 登亀男編『「仏教」文明の受容と君主権の構築－東アジアのなかの日本－』勉誠出版、査読無、2012、pp267－294

㉗大久保 良峻、発心即刻と自心仏、天台学報 53、査読無、2011、pp13－20

〔学会発表〕（計 83　件）

①河野 貴美子、「鬼」を語り記すことの意味－『日本霊異記』と内典・外典－、説話文学会、2014,12,13、奈良女子大学（奈良）

②森 由利亜、道教の出家戒の成立と継承、日韓中共同国際シンポジウム「仏教文明の拡大と転回」、2014,10,25、早稲田大学（東京）

③城倉 正祥、デジタル技術・非破壊的手法を用いた古代寺院における伽藍配置の調査研究－下総龍角寺の測量・GPR（レーダー探査）調査－、日韓中共同国際シンポジウム「仏教文明の拡大と転回」、2014,10,25、早稲田大学（東京）

④新川 登亀男、日本仏教以前の仏教、日韓中共同国際シンポジウム「仏教文明の拡大と転回」、2014,10,24、早稲田大学（東京）

⑤大久保 良峻、平安初期における日本密教の樹立と教学交渉、密教研究会大会、2014,7,11、高野山大学（和歌山県）

⑥河野 貴美子、古代日本の仏教説話と内典・外典－『日本霊異記』を中心に－、国際シンポジウム「言語・文字の転回からみた『仏教』流伝」、2013,12,21、早稲田大学（東京）

⑦大久保 良峻、最澄の名言、天台学会、2013,11,16、大正大学（東京）

⑧新川 登亀男、仏教は、なぜ流伝したのか－日本からアジアをみる－、国際シンポジウム「古代東アジアの仏教文化交流とシルクロード」、2013,8,16、陝西師範大学（中国西安）

⑨肥田 路美、仏教美術における模倣の諸相と意味－スタイン将来「西域仏菩薩図像集」を題材に－、国際東方学者会議、2013,5,24,日本教育会館（東京）

⑩工藤 元男、具注暦の淵源、シンポジウム「中国占い文化の日本的展開」、2013,1,26、早稲田大学（東京）

⑪大久保 良峻、『法華経』顕密論－最澄から安然へ－、天台学会、2012,11,10、叡山学院（滋賀県）

⑫肥田 路美、九世紀仏教彫刻的主題与図像－四川省夾江千仏岩摩崖為中心－、東洋美術史学会、2012,10,13、韓国国立中央博物館（ソウル）

⑬肥田 路美、天龍山石窟唐代窟の尊像構成について、天龍山石窟・龍山石窟国際学術研討会、2012,9,15、天龍山石窟研究所・龍山文物保管所（中国太原）

⑭李 成市、天龍山勿部珣功徳記にみる東アジアにおける人の移動、天龍山石窟・龍山石窟国際学術研討会、2012,9,15、天龍山石窟研究所・龍山文物保管所（中国太原）

⑮河野 貴美子、古代日本仏典注釈書所引的《文選》初探－以善珠撰述書為中心、中国文選学会、2012,8,25、河南大学（中国開封）

⑯新川 登亀男、「法王」と「法皇」、日韓合同シンポジウム「百済弥勒寺西塔の舎利奉安からみた『仏教』文明の東方移動」、2012,7,14、

早稲田大学（東京）

⑰工藤 元男、「日書」の史料的性格について、日中学者中国古代史論壇、東方学会・中国社会科学院、2012,5,25、日本教育会館（東京）

⑱河野 貴美子、『海東高僧伝』の叙述方法、国際シンポジウム「古典籍にみる高僧伝」、2012,1,14、屯渓（中国安徽省）

⑲新川 登亀男、百済と日本の飛鳥・奈良における仏教文化、国際学術大会「東アジアの仏教文化と百済」、2011,10,4、公州（韓国）

⑳李 成市、東アジアにおける百済木簡、東亜的簡牘与社会－東亜簡牘学探討学術検討、2011,8,30、北京（中国）

〔図書〕（計 23　件）
①新川 登亀男編『仏教文明と世俗秩序』勉誠出版、2015、総ページ 602

②新川 登亀男編『仏教文明の転回と表現』勉誠出版、2015、総ページ 665

③李 成市編『岩波講座日本歴史』21 巻、岩波書店、2014、総ページ 351

④新川 登亀男編『古代における南西アジア文化とヤマト文化の交流に関する調査・研究（総集編）－南天竺婆羅門僧正菩提僊那を廻って－』早稲田大学・奈良県、2014、総ページ 274(図版除く)

⑤大久保 良峻編『天台学探尋』法蔵館、2014、総ページ 342

⑥新川 登亀男編『「仏教」文明の東方移動－百済弥勒寺西塔の舎利荘厳－』汲古書院、2013、総ページ 286

⑦王 勇・河野 貴美子編『東アジアの漢籍遺産－奈良を中心として－』勉誠出版、2012、総ページ 412

⑧大橋 一章・新川 登亀男編『「仏教」文明の受容と君主権の構築－東アジアのなかの日本－』勉誠出版、2012、総ページ 381

⑨川尻 秋生、シリーズ日本古代史 5『平安京遷都』岩波書店、2011、総ページ 223

⑩肥田 路美『初唐仏教美術の研究』中央公論美術出版、2011、総ページ 502

⑪河野 貴美子・張 哲俊編『東アジア世界と中国文化－文学・思想にみる伝播と再創』勉誠出版、2011、総ページ 366

⑫工藤 元男『占いと中国古代の社会－発掘された古文献が語る－』東方書店、2011、総ページ 279

⑬新川 登亀男・早川 万年編『史料としての「日本書紀」－津田左右吉を読みなおす－』勉誠出版、2011、総ページ 576

６．研究組織
(1)研究代表者
新川　登亀男（SHINKAWA　Tokio）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：50094066

(2)研究分担者
肥田　路美（HIDA　Romi）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号： 00318718

河野　貴美子（KONO　Kimiko）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：20386569

大久保　良峻（OKUBO　Ryosyun）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：30213664

李　成市（LEE　Sungsi）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：30242374

森　由利亜（MORI　Yuria）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：30247259

工藤　元男（KUDO　Motoo）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：60225167

川尻　秋生（KAWAJIRI　Akio）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：70250173

高橋　龍三郎（TAKAHASHI　Ryuzaburo）
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：80163301

城倉　正祥（JYOKURA　Masayoshi）
早稲田大学・文学学術院・准教授
研究者番号：90463447
2013 年度以降、研究分担者

＊大橋　一章（OHASHI　Katsuaki）
現在、早稲田大学・名誉教授
2012 年度定年退職時まで研究分担者
（早稲田大学・文学学術院・教授）
（研究者番号：80120905）